筑波学院大学紀要第10集　109 ～ 119 ページ　　2015年

＜研究ノート＞

市町村博物館と先人学習

千葉　隆司*

Municipality Museum and Ancient People Learning

Takashi CHIBA *

抄　録

地方が疲弊する現在、地域社会のあり方について真剣に考える必要性が生じてきている。地域社会がより良い方向へ進むための一つに、地域の魅力を理解し、その魅力を活かすことが上げられる。地域史を振り返ると、その地域の魅力となる特性が学びとれ、そこに育まれる文化を知ることができる。これらの地域情報を知ることは、愛着や誇りにも繋がり、地域活性化の原動力と成りえるのである。

地域には、そこに根ざした様々な力があり、それは他地域からの魅力となる。都市に倣い、実施されるまちづくりは、地域の魅力を活かさず、いつの日か地域の魅力を忘れさせつつある。地域の魅力を認識し活用することで地域にしかできない本来のまちづくりが可能となるのである。

地域史を紐解くと、そこには先人の苦労の上の努力が垣間見れる。地域に生きた先人を学ぶ学習は、地域の魅力を知る手がかりになると共に、地域社会をより良くするための道徳的観点を学ぶ上でも有効なものとなる。さらに先人には、地方に留まらず、中央で活躍し国の行く末まで案じた人々がいる一方で、地域で培われた志を胸に、国際社会へ羽ばたいていった先人もいる。こうした先人の生きざま、社会貢献には数多くの学ぶべき事柄があるのである。

市町村博物館に集積される地域情報の中には、必ずといっていいほど地域の先人情報が含まれている。地域の先人学習は、埋もれつつある地域の魅力や現在重要視される道徳性を知るきっかけとなり、地域への愛着や誇りへ繋がる要素となる。そうした思いは、地域活性化への知恵と発展する。

小論では、筆者が経験した市町村博物館での先人学習を例に挙げ、今後の先人学習が地方創生、加えて日本再生の多大なヒントとなることを紹介してみたいと思う。

キーワード：市町村博物館、先人学習、地域社会、地域の魅力、道徳教育、地域創生、地域活性化

＊　非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

１．はじめに

近年は、地方の疲弊が著しい。少子高齢化による急速な地域社会の構造変化が、負の連鎖を生み出し、明らかに地方に元気力が窺えなくなってきている。合理的（生活に必要な施設や物資が身近に揃う）・経済性（労力や費用を最小限度に抑えられる）を重要視する社会においては、そうした要素が整備され、利用できる都市に人口が集中し、地方人口が減少、地域力が衰える傾向にある。当然、地方における愛着や誇りといったものも人口が流出及び減少するに従い負の連鎖となって低下するため、第三者に地方における地域力や魅力が伝わらない状況になる。現代社会における人間が求める生活するに値する魅力は、人工的に作り上げられた便利で豊かな空間であり、それまで重要視してきた自然との共生によって育まれた地域魅力は意識されない状況となっている。しかも、現代人が求める人工的な生活環境は、郊外や地方の自然に多大な負荷を負わせることになり、環境破壊や水質汚濁、大気汚染といった公害を生み出すこととなった。こうした地域における様々な負の連鎖は、言うまでもなく更なる愛着や誇りを住民に失わせるに至り、地方疲弊に拍車をかけるものとなっているのである。

合理的・経済性を重視する現代社会に一極集中的な都市の人口動態、それに連動し生ずる地方疲弊は、地方における魅力を見失わせている。「所変われば品変わる」の言葉通り、南北に長い日本列島では、全国各地に様々な魅力があった。江戸時代に整備された五街道及び脇往還などに設けられた宿場町を中心とする地方都市や農村は、行き交う多くの人々で賑わうと共に地方産業や特産品などを生み出し、隆盛していったのである。歩く移動が一般的であった時代には、自らの体力に合わせ、休憩や宿泊をとるためにスピードある現代社会の移動のような出発地と目的地の往来ではなく、その過程なども楽しむため地方分散型の人口動態があった。そこに、地方ならではの要素が生み出され、発展して地方が元気であり続けていたのである。

小論では、こうした地方疲弊の改善策として、地方で生まれ育つ人々や移住してきた人々に対し、改めて地域の良さを感じて愛着や誇りを抱いていただき、都市部の人々も地域の魅力を感じて地方が活性化するための一案を紹介する。それは、地域史の中に存在する先人に学ぶということである。

２．人間と社会

人間は、考えて言動することからほかの生物とは違っている。そうした行為は、家族という単位の中に生まれて、基本的な生き方を学ぶことから始まっている。この家族を基本単位とした人間が、社会を構成している。このような社会構成を考えると、家族から始まる生き方学習が、その後も年齢に応じて段階的に継続されていくことが、重要となる。

幼少期は、親や祖父母といった家族の生き方（経験）に基づいて教育を受け、生きるための基礎知識を学ぶ。青年期は家族から学んだ基礎知識を元に、学校や地域社会の中での多様な情報を得て、試行錯誤しながら自分を見つめなおし、人生の理想を求め経験を積んでいく。中年期は、それまでの経験を通じて自分の可能性や限界を知るが、幅広い分野にお金と時間を使用することができ成長する。向老期は、社会が老いと位置づけはするものの、自らは向上心を持ち続け、人生後半期の生き方を考えるようになる時期である。高齢期は、まさに第二の人生の生きがいを探してみつけ、有終の美を飾るべく人生を楽しむ時期となる。このような人生の流れの中で我々は、常に生き方を様々な形で学んでいるのである。

平成26年度には日本人の平均寿命が男女と

もに80歳代となった。人生80年という高齢化の時代に、どのような生き方をすべきか、どこに生きるべきか国民一人ひとりが考えなくてはならない。生まれた場所、育つ場所、学校教育を受ける場所、社会人として生活する場所など一定の場所に留まらないことが多い現代社会では、生き方に大きな影響を及ぼす生活環境に、そして生きる場所に無頓着になりやすい。冒頭に示した合理的・経済性ばかり追求していくと、限りない自らの欲求のみで物事を考える人生に終始してしまい、愛着や誇りに到達せずに本来考えるべき人生観の表層部分のみを経験することで満足する、薄っぺらい人生となってしまうのである。このような生き方を送る国民が増加すると、地方疲弊は加速していくのである。しかし、人生の段階的な教育環境の中で、地域史を学び、そこに登場する偉人や賢人などの先人学習をすることで少しずつ地域に興味・関心がわいてくるのである。地域への興味･関心は、地域への社会貢献や活性化への言動として発展することも多いため、大切に育成していきたい要素である。

人間が社会を構成する以上、より良い生き方をする人間を増加させなければならない。より良い生き方は、繰り返しになるが合理的・経済性を追っていくものではなく、様々なものに対し愛着や誇りを大切にするという根幹によって経験が積まれ、発達・成長していくものなのである。

３．歴史に学ぶ姿勢

江戸時代に歴史学習の重要性を説いた人物に水戸藩二代藩主の徳川光圀がいる。光圀は、18歳の時に中国の歴史書である『史記』と出会い、それまでの自らの生き方を改心したという。歴史には、先人の歩んだ道、それぞれの時代に生きた人々の経験や体験が刻まれており、より良く生きるためのヒントや教材があり、それを学ぶことで人間として正しい道を歩み、より良い社会を切り開きながらすばらしき未来が構築できるものと考えたのである。

現在は過去とつながっており、現代社会の問題点の要因が過去に求められることは多くの事例に認められることである。当然といえば当然のことであるが、歴史事象を紐解いていくと、それらすべてに因果関係がある。政治・経済に関わる出来事や庶民の暮らしに直結する出来事など、歴史事象にも大小が存在するが、すべて原因があっての結果であった。現代社会の課題解決として場当たり的な政策がよくみられるが、本質や原点を考慮しなければ本当の課題解決にならないのである。そしてまた、同じ過ちを繰り返すこととなる。

一旦解決した課題もその後、忘れた頃に再発し、繰り返す歴史となる場合が多い。現代社会は、発展に伴い豊富な物質文化の時代となったが、人間の行動や精神文化はあまり変化がないように思われ、歴史にあった比較的類似する課題が再び存在している。権威・権力に関わるもの、産業・経済に関するもの、家族や地域に関する課題は、いつの時代も存在するのである。人間の永遠の課題ともいうべきこれらには、克服し安定期間を保つ場合もあるが、再び生ずるといった現象がみられため、過去を参考にしながら解決策を考えることが可能となる。課題解決やより良い未来を形成していくため歴史を学び、考えることは重要な事なのである。

翻って、歴史教育・学習といえば出来事が起きた年号、関わる人物名や地名などを暗記することが重要と認識されることが多い。その多くの学生が常に暗記を必要と考えることから、嫌いな科目の筆頭に歴史を挙げることが多い。このような歴史教育は、本当の目的である「歴史に学ぶ」といった社会を考えるための教養という目的を逸脱しており、単な

る試験や受験のためだけの知識としか考えられない科目に陥られることにつながる。歴史は、物知りになるための学問ではなく、先の徳川光圀が認識したようにより良い社会を考えるため、人として正しく生きるため、社会にあってはより良き人材を生み出し、より良き将来に導くための重要な学問なのである。

一方で、学校教育の中の歴史教育は、列島規模や世界規模が重視されるため、身近なものとして捉えにくいことも、嫌われる科目の一つの要因といえる。地域の歴史が記載される副読本的な教材もあるが、教員によっては教材研究に時間がさけず、地域を知る時間が得られないまま人事異動で他地域に行ってしまう教員も多く、地域史を学ぶ機会が少なくならざるを得ない現状もある。グローバルなものの見方をする現代社会において基本となる事は、自分が生きる場所の成り立ちを知ることによって生じる愛着・誇りといった感情であり、他との比較や尊重する精神となる。しかし、前述したようにこうした精神を育むことが学校教育に求められないということであれば、家庭教育や社会教育の中で補うべきものとなる。こうした地域史を学ぶことで、歴史を身近な事象と捉えられ、自らが生きる、地域に生きる意味などを知り、自らが何をすべきかなどの社会貢献についてなど、さらに自国を知ることで他国との比較対象が可能となり、良い点を学ぶ姿勢が表れ、より良き国際社会の未来へ考えを発展させることができるのである。

4．地域力と先人

地域力とは、地域に根ざした様々な力であり、他地域から見れば魅力となるものである。それぞれの地域の自然には地形・地質・動植物そして景観等があり、その地を初めて訪れた人には第一印象として受けるものになる。そうした地域の特性に、特産物、産業、人物などが生まれるのである。地域の特性に応じて形成されてきた様々なすばらしき文化は、ここに生きる人々には愛着と誇りとなり、他地域の人々には魅力として感じ取れる。しかし、現代社会といえば、都市計画が全国一辺倒になりがちで、全国どこへ行ってもあまり変わり映えしない景観に加え、高速道路をはじめとした交通網の整備により流通の短時間化が実現したため、全国各地の特産物が四季を隔てなくどこでも購入することができ、それぞれの地域力を埋没させる時代となった。

しかし、改めて地域をみてみると同じような景観の中にも地域の歴史が刻まれた動かざる史跡や名勝が残っていたり、地方特産物も生産される地域で食したりする方が新鮮であり、雰囲気の中で特別おいしく感じられたりするのである。こうした史跡・名勝や特産物などはすべて地域の先人が地域の特性として苦労と努力の上に創り出し、その後の人々によって継承されてきたものである。この地域力の根本、原因、成り立ちを知る事は、地域のすばらしさを学ぶこととなり、そこから愛着や誇りといった郷土愛的な感情が生まれていくのである。地域を知れば知るほど、地域への感情が高まり、地域を盛り上げる人財ともなる可能性がある。

歴史は、人間によって刻まれてきたものであり、地域史を学ぶと自ずと地域に生きた人々の人生感を学ぶこととなる。先人抜きにして歴史は語れないのである。時代や地域の社会によって人間の生き方も変化するが、人間の生きるための絶え間ない努力や苦労の姿は変わらない。地域には特性に応じ、生き抜いた先人の姿があるのである。

5．博物館における郷土教育と先人学習

先人の中には、地域の様々な分野で活躍し、社会貢献した人物が必ず存在する。地域

に生き、様々な経験を経て、社会に功績を遺した先人がいるのである。

食に困らずに医学が発展した現代には、生き抜くことが比較的容易になってきた。生きるための食事が、食欲を満たすための食事となり、不治の病であったものが完治する時代であるため、生きる事への真剣な姿勢は減少傾向にあるようである。生きることを真剣に考えることが薄れいだ時代に、生きる事は簡単・単純と考えられがちだが、当然であるが非常に難しいものである。生きるには身体的な問題もあるが、生きることへの望みや生かされているという自分一人ではない、支え合いながらの人間社会に感謝が伴うかで生きる意味や位置づけが変わり、生きる事への執着度が変わるのである。先人は、生き抜くことに真剣であった。この世に生命を受けた以上、命を使い切るために苦労に努力を重ねて、いつの時代も必死に生き抜いていたのである。

博物館に集まる情報の中には、必ず地域の先人情報がある。その多くが、郷土の偉人として郷土学習や道徳教育等において紹介され、学校教育をはじめ社会教育的にも扱われている。こうした先人学習は、地域を特徴づけたり、観光的効果も生み出すものともなり、教育効果以外の地域活性化にも役立てられている。いわば、多岐にわたる効果が期待されるもので、地域に住む方々にはまさに愛着と誇りをもつには十分な要素となっている。

それでは、次に郷土教育と先人学習の具体例として筆者がかすみがうら市郷土資料館において実施した事例を紹介してみよう。

まず、郷土の幕末志士の竹内百太郎、伊東甲子太郎、古渡喜一郎である。これらの人物の共通点は、激動の幕末期に現在のかすみがうら市域に生まれ、自らも新しい国づくりのために貢献したいと行動を起こしたことである。竹内百太郎は水戸藩天狗党として、伊東甲子太郎は新選組として、古渡喜一郎は新徴組として志を持ち人生を全うした人物であった。それぞれ商人・武士・農民の家柄に生まれた彼らは、尊王攘夷の教育を受ける中で、自らの志をたて各々の立場を越えて新しい国づくりのために勇猛果敢に行動していったのである。百太郎は、醸造業を中心とした豪商という裕福な家柄に生まれた人物であるが、そうした状況に埋もれず、勉学に励むことで当時の日本社会を憂い、新たな国づくりに参加することを志していった人物である。20代にして水戸藩小川郷校や玉造郷校の館主となり、水戸藩南領の多くの人々の教育に携わった。その教育は、新しい国づくりには武士だけではなく多くの国民の力によって成し遂げられるというものであり、封建社会の江戸時代ではあるものの身分を越えた行動を自らがリーダーとなり実践していったのである。そして天狗党三総裁の一人となって元治元年（1864）に筑波山義挙に至ったわけであるが、水戸藩内部抗争に巻き込まれるや新しい国づくりへの方向性や指導力を失いつつも、最後の望みを徳川慶喜にかけ西上行軍となるが、幕府軍の追討を受け越前国敦賀において志半ばで露と消えてしまった人物である。

伊東甲子太郎は、文武両道の武士であったが、混乱極める幕末社会に立ち上がり、多くの門弟たちに支持されながら、新選組に入隊し自らの信念を貫き真剣に日本の将来を考えた人物である。交代寄合本堂家の家臣であった鈴木専右衛門の家に鈴木大蔵（後の伊東甲子太郎）として生まれ、水戸に遊学しながら水戸学や剣術の研鑽に励んでいった。青年期には、父専右衛門の私塾「俊塾」の近くに支塾を開き、庶民に学問を教える立場となるが、地方に留まる事を嫌い江戸遊学に出た。江戸深川の伊東精一道場に入り、剣術を極めると共に志士たちとの交流を深める日々を送り、次第に剣術指南、そして伊東道場を引き継ぐ腕前となり伊東大蔵と名乗るようになっ

た。そうした中、以前の弟子ですでに新選組隊士となっていた藤堂平助から新選組への勧誘を受け、承諾した。入隊の年が元治元年（1864）で干支が甲子であったことから伊東甲子太郎と改名し、新選組参謀という特別職の中で活躍する。しかし、水戸学を学び尊王思想で新しい国づくりを考えていく姿勢は、新選組局長の近藤勇とは意見を異にし、甲子太郎は新選組高台寺党という別隊として再活動するようになる。しかし、そうした行為を良しとしない土方歳三ら新選組隊士により暗殺されてしまう。甲子太郎が朝廷へ提出した建言書は、勤王思想をもとに武門による政治体制を全廃させ、朝廷が直接に政治を掌握するとしたもので、朝廷を頂点に一和同心し国内がまとまるというものであり、坂本龍馬の船中八策と共に当時の国政への意見書としては大変重要なものであった。

古渡喜一郎は、竹内、伊東らとは異なり幕府による国政維持を考え、江戸幕府に最後まで忠誠を尽くした人物である。青年期に水戸藩へ遊学する中で尊王攘夷に加え、敬幕に重きを置く志士となり、文久３年（1863）の将軍家茂上洛の際は、護衛する組織となった浪士組に入隊している。上洛後に喜一郎は、浪士組のリーダー清河八郎と共に再び江戸に戻ることを決意し、庄内藩支配の新徴組へと身の置き場を変えていった。水戸藩への遊学時期には、諸生党の筧助太夫の家来として活動した喜一郎だったので、勤王佐幕的な思想の基に、戊辰戦争では最後まで幕府に忠誠を尽くした庄内藩士として活動することとなった。明治維新を迎え、郷里に戻った喜一郎は警察官として活躍する。責任感あふれる様子が、残された資料から窺え、国を守るといった志を持ち続け、明治21年（1888）45歳の人生を全うしたのであった。

これら幕末志士の３名は、激動の時代にそれぞれの志をもって生き抜いた人物なのである。

続いて、日本における食肉加工の先駆者である飯田吉英を紹介する。飯田吉英は、明治９年（1876）に戸崎村（現かすみがうら市）に生まれた。大農家の後継ぎであったが、農業が好きになれずにおり、そうした状況は自らが農業について真価を理解していないからと考え、東京帝国大学農科大学実科に入学する。時代は日露戦争となり、国家を憂う心情から吉英も兵として志願し、戦地へ赴くこととなった。戦地での吉英は、その地域での農業や家畜についても関心をよせるようになり、現地での観察調査を行っていく。そして戦乱の中で敵国であるロシア人と日本人の体格･体力の差を痛感し、同じ人間でどうして、このような違いが生じるのか考えた時に、日本人の食生活に肉食が少ないことに気づいたのであった。加えて満州国で畜産について調査して行き、食肉文化の重要性を感じるのである。吉英は、いつの日かのアメリカでの畜産学留学を決心していくのであった。

日露戦争から凱旋帰国した吉英は、神奈川農会にて農政の仕事に従事するが、畜産学研究の夢は捨てきれずにいた。そうした中、農商務省からの海外実習練習生の希望依頼が飛びこんできた。吉英は、妻の親戚から農商務省の知り合いを紹介してもらい、採用辞令を頂くことに成功した。明治40年２月に横浜港を出発した吉英は、アメリカにおいて第一流の産業大学であるイリノイ大学へ入学し、本格的な畜産及び食肉加工の研究を始めた。さらに大学院に入学し、短期間のうちに修士論文を仕上げ、マスターオブサイエンスの学位を修得し帰国する。

アメリカから帰国した吉英は、千葉市に設けられた農商務省の畜産試験場で働くようになった。丁度その頃、第一次世界大戦が勃発し、日本は日英同盟の関係でドイツに宣戦布告する。ドイツに優勢な戦いをする日本は、ついにドイツ軍を攻略し、日本国内12か所に及ぶ捕虜収容所に4700人に及ぶ捕虜兵を

収容した。吉英が勤務する畜産試験場の付近にも習志野捕虜収容所が設置されたが、その中にソーセージマイスターのカールヤーンがいた。そうした情報を聞きつけた吉英は早速ソーセージ作りの方法の教えを請うが、カールヤーンは、自らのソーセージ作りに関する知識や技術を教えることはギルドという組織に所属している以上、難しいと言ったが、カールは吉英の情熱に負け、大正７年(1918)にソーセージ実験と称し、吉英に対してソーセージづくりの技術伝承を行った。ドイツ式ソーセージの特徴は残肉を使用せず、美味な部分のみ使用すること、そこに吉英は注目して、このソーセージこそが日本人に合う食肉加工品であると認識したのであった。その後、吉英は、国内にソーセージによる食肉文化を広めようと大正８年（1919）の畜産工芸博覧会の主任審査官などとなり、それ以降も国内における食肉加工品の製造を目指す人々に対し指導を行った結果、次第にソーセージの質も上がり、国内生産が増加していくのであった。飯田吉英は、殖産興業、富国強兵を目指す日本に、食肉文化において貢献する一人物であったのである。

続いて、経済こそが近代日本の幕開けにふさわしいと、明治維新を迎えた日本に貢献した高島嘉右衛門を紹介する。嘉右衛門は、高島易断の祖として著名であるが、ここでは実業家として業績を紹介する。高島嘉右衛門は、天保３年（1832）に牛渡村（かすみがうら市）の薬師寺嘉兵衛の子として生まれ、幼名を清三郎といった。父嘉兵衛は、22歳の時に江戸に出て、知人の紹介で材木店兼普請請負商に勤めた。嘉兵衛は、熱心に業務にあたったことから店を任され、次第に独立していった。多くの方々から信頼を得た嘉兵衛ではあったが、広く多くの人々と交流する中で自らの無学さを知るようになり、息子の清三郎には同じ思いをさせたくないと清三郎には、当時の代表的な学問であった四書五経を教え、人間の道徳・倫理観を示した六諭衍義を母親に教えさせた。14歳になった清三郎は、元服を迎え父親の稼業に従事するようになる。そうした中で、清三郎は南部藩や鍋島藩などの諸藩の仕事も受けるようになり、手広く事業を展開していった。慶應元年(1865)にすでに日米通商修好条約によって開港した横浜に拠点を移し、名前を母方の屋号をとって高島、名も嘉右衛門に改め、心機一転しさらなる事業を展開していくのであった。まず、日本列島を鉄道で結び、国としての一体感を強め、鉄道事業による内需拡大を図る。さらに「高島学校」を設立し、富国強兵のための人材育成、旧来の薪炭に代わる燃料政策としてガス事業に携わり、横浜に日本初のガス灯をともすことに成功している。ガス灯の明かりは、天覧にも供せられ、この時に嘉右衛門はここまで育て上げてくれた父母への感謝の気持ちから、着物の背中に父母の位牌を忍びこませ、明治天皇に拝謁したという。このような業績から現在の横浜発展の基礎は、高島嘉右衛門が造り上げたものなのである。

６．先人学習から学ぶこと

幕末志士の竹内百太郎、伊東甲子太郎、古渡喜一郎は、尊王攘夷という教育を受け、自らの信念による志を貫き、封建社会でありながらも自らの力を信じて、身につけた教養を実践すべく言動していった。教育は、社会に応じた内容と目的を持つものだけに時代と共に進化すべきものである。しかしながら、昨今の教育は競争社会の中でより上の課程に進むべき単なるツールの傾向があり、学校教育の修了後はさほど活かしきれていないように思われる。教育や学習は、本来人間社会の基本となる、より良い人材を育成することに最大の目的があるのである。そのためにも、実践的教育でなければならないのである。幕末志士は、教育環境は不十分でありながらも、

学習した内容から自らが生きるべき道を問い、地域に生きる中でも国家を構成する一人と認識し、不安な世情に飛び込み自らの力を試していったのであった。そこには、無駄や無理といった諦め、無関心さはなく、プラス思考の向上心のみが存在していた。老ティーンと揶揄される現代の若年齢層に代表される、「無理と思うことにはあえてチャレンジしない」、「当たり障りなく生きる」の言葉のような心情とは正反対のものである。竹内百太郎、伊東甲子太郎、古渡喜一郎は、内憂外患の不安定な日本社会に生き、教育を受ける中で、真剣に日本社会の未来を考えた地域の人物なのである。

一方の飯田吉英の人生を顧みると常に国家のために貢献する意識が窺え、明治という時代だけに先述の幕末志士たちと同様な精神であったことが分かる。そのような精神は、国家を支える一国民として忘れてはいけないものである。国民一丸となって国づくりを考え、貢献することは、国家の繁栄に繋がる重要な要素であり、国家の繁栄は国民生活に反映するものとなる。

経済による近代日本を考えた高島嘉右衛門は、様々な困難にめげることなく、自らの信念を貫き、幅広く事業を展開させ、驕れることなく日本の国づくりを横浜から実施していったのである。列島規模での国家ビジョンのもとに、そこに横浜の特性を考え、日本の中での横浜の位置づけ、役割を想定し、交通、エネルギー、教育と多面的に横浜の都市計画を実施していったのであった。

以上、郷土教育の中で５名の先人学習の事例を紹介したが、その他自らの発明を多くの漁師に教え霞ヶ浦漁業の発展に導いた折本良平、医は仁術のとおり生き抜いた江戸時代の医師の山本鹿州など順次、郷土の先人を掘り起し、かすみがうら市郷土資料館において特別展や講演会、講座等で情報発信している。その都度、新聞やテレビなどマスコミにも取り上げられ、かすみがうら市民はもとより市外の多くの方々にも郷土の先人を紹介することができている。また、この情報発信を機に、市内小学校の出前授業や公民館講座などの教育分野、そして関連する方々や他地域との交流も深められ地域活性化分野にも展開しており、郷土教育の中の先人学習の波及効果を実感している。

７．おわりに　郷土の先人学習と道徳教育、地域活性化

郷土の先人学習は、列島史で進められる学校教育の歴史学習をより良く理解するため重要なものである。過去を振り返るという歴史教育は、先人の生き方の集大成を学ぶことであり、そこにはそれぞれの社会背景の中で生きた先人たちの道徳・倫理観が存在する。

小学校学習指導要領の道徳教育の第５学年及び第６学年の内容には、「郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ（下線筆者）」とある。その解説には「この段階においては、郷土を愛する心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることが大切である。そのためには、郷土や我が国の発展に尽くし、伝統と文化を育てた先人の努力を知り（下線筆者）、自分もまたそれを継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。」、一方で中学校学習指導要領の道徳教育の内容には「地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め（下線筆者）、郷土の発展に努める」とあり、小学校・中学校共に先人たちの足跡を学び郷土愛や国への感謝などを醸成することが盛り込まれている。特に郷土の身近な先人たちの足跡は、郷土に生きる現代人に自らの生き方を見つめなおさせる要素を多

大に秘め、さらには地域や国家を支えた先人の情報を知ることによって、自ずと自らが生きる目的、社会に貢献できること、そして自らの言動も国家を動かすことにも繋がることが実感できるのである。

科学技術が発展し、社会が成熟した現代社会に、様々な判断が多くの人々に求められている。自由・平等をもとに価値観が多様化する現代社会にあっては、様々な事象を判断するにあたり高い倫理観と道徳的資質が必要なのである。そうした道徳・倫理観を学び身に着けるための教材や資料としても有効なのが郷土教育や先人学習なのである。

郷土を郷土で学ぶこと、そこに先人内容が含まれることで、郷土への愛着や誇りが醸成されるのであるが、そこから派生する地域活性化の要素もある。先人の足跡は、地域とのかかわりの中から生じた社会貢献が多い。この点に注目すると、現代に生かせる地域活性化のヒントがみえてくる。地域活性化といえども経済効果に焦点を当てるものばかりでなく、地域の特徴が出せ、地域住民を元気にさせる事象全般である。こうした視点に立つと、前述した筆者が行った３つ先人学習から次のような地域活性化要素を見出すことができる。幕末志士は、志をもつに至る教育を受け、その志を貫き通す生き方を紹介したが、こうした志を育む、目標・目的を定め進む方法など特徴ある教育システムの構築による地域活性化案である。学校教育では、特色ある学校づくりが実施されているが、まさに地域に生きた先人学習は特色ある教育の中心的教材にも成りえる。いかにして偉人となるべき幼少期や青年期を過ごしたか、地域での関わりは何であったかなど教育的観点に注目し、先人の出身地でその要素を特色ある学校教育に取り入れるのである。

食文化による近代社会の構築を目指した飯田吉英からは、食文化による地域活性化、地域の特産物によるスローフード、B 級グルメ開発、六次産業といったものである。食に注目した地域活性化は、全国各地でみられるが、意外と地域史や地域の先人との関わりを考えたものは少ない。現在は見られないが遺跡から出土したり、中世文学に登場するものや旧街道の宿場の名物であったり、先人が好んで食したもの、初めて食したもの、他地域からもたらし栽培に成功したものなど、こうした歴史や先人と関連付けられる食の要素が全国的にまだまだ埋もれているのである。

近代社会における都市計画やインフラ整備を通し新たなまちづくりを実施した高島嘉右衛門からは、地域の特性（地理的環境や地域住民の生活環境、地場産業との関連を重視した）を考慮したまちづくりによる地域活性化案などがあげられる。日米修好通商条約により開港した横浜という漁村にいち早く注目し、将来性を見出し、近代化に向けた様々な基盤を横浜から創り出していった高島嘉右衛門は、横浜という地域の特性を活かし、発展させたのである。現代は、全国的に類似するグラウンドデザインを描くために山を削り、谷を埋め、全国一辺倒な景観となるまちづくりになりがちであるが、地域の特性や景観、そして自然環境に育まれる産業を活かしたまちづくりが今後の活性化を呼ぶ要素といえる。成熟した現代社会に人口減少をめぐる議論が深まる中、今後は経済成長ではなく人間らしい、心安らぐ生活空間、本当の豊かさが求めらていくと考える。そうした時に、人工的につくり上げられてきた都市的空間ではなく、人間と自然との共生が体感できる地域的空間が地域活性化、まちづくりは強みといえるのである。

先人学習は、以上のような道徳的要素や地域活性化へ導くヒントとなることが可能となるが、これは学習した人々の成果による発展的要素、つまりは自然に導かれる郷土への愛着や誇りの精神から展開するものである。筆者の経験では、先人学習を含めた郷土学習を

通し、郷土への思いを強くした市民は数多く存在し、それらが道徳的要素であり、まちづくりの要素であったことから実感するものである。

地方創生が叫ばれる現在、地域を愛するそして地域を考える人材が増加することが地域を創生するための基本原則である。それぞれの地域の良さは、地域を知ることから始り、地域に生きた先人が教えてくれるのである。そうした郷土学習・先人学習の動きが列島各地区で実施され、地域の良さが次々と話題にされ、地域で生きる意味を感じることが国民全体に広がれば、自ずと地域創生となり、人口減少にも影響を及ぼすことにも繋がるものと考える。繰り返しになるが、人工的に作り上げられた全国的に普遍的になりつつあるものよりも、自然的に発生する地域風土の中に存在するものとの共生が、心豊かな人間を形成し、すばらしい生活環境を整える要素なのである。郷土学習や先人学習は、そうした地域の素晴らしさやそこに生きる自分を見つめなおさせる重要な情報である。市町村博物館は、こうした情報を日頃から資料収集、調査研究により集積しているのである。地方創生においても市町村博物館の役割が再認識され、市町村博物館から地域が元気になるシステムが構築できるよう筆者は、努力し続けていきたいと思う。

参考文献

1）千葉隆司　2005『帆曳網漁の世界』かすみがうら市郷土資料館

2）千葉隆司　2008『ソーセージの父　飯田吉英』かすみがうら市郷土資料館

3）千葉隆司　2009『かすみがうら市の幕末群像』かすみがうら市郷土資料館

4）小寺正一　藤永芳純編　2009『道徳教育を学ぶ人のために』

5）千葉隆司　2010『高島嘉右衛門とかすみがうら市』かすみがうら市郷土資料館

6）千葉隆司　2010『新選組と交代寄合本堂家』かすみがうら市郷土資料館

7）文部科学省　2012『中学校学習指導要領解説道徳編』

8）文部科学省　2012『小学校学習指導要領解説道徳編』

9）千葉隆司　2012「市町村博物館の時代－真の日本人と地域コミュニティ再生への重要拠点－」『筑波学院大学紀要』第７集　筑波学院大学

10）千葉隆司　2012『かすみがうら市の近世医学』かすみがうら市郷土資料館

11）千葉隆司　2013「市町村博物館と生涯教育－地域社会からの人づくり－」『筑波学院大学紀要』第８集　筑波学院大学

12）千葉隆司　2013『新徴組と古渡喜一郎』かすみがうら市郷土資料館

13）千葉隆司　2014「市町村博物館と子供教育」『筑波学院大学紀要』第９集　筑波学院大学

かすみがうら市の幕末群像展示風景

かすみがうら市の幕末群像史跡学習会

飯田吉英展展示風景

ソーセージ作り体験教室　小学校出前授業風景

高島嘉右衛門展展示風景

高島嘉右衛門展記念講演会風景